

## 書評

永守伸年著

『カント 未成熟な人間のための思想——想像力の哲学』

(慶応義塾大学出版会、2019年)

勢力 尚雅

### 1. はじめに

評者は、カント研究者ではない。美的判断と道徳的判断を潔癖なまでに区別することをあえて慎む、ヒュームの一連の著作に関心と共感を寄せる者である。したがって、評者のカントについての関心は、美的判断と道徳的判断のつながりを精力的に論じた『判断力批判』へと偏っている。永守氏（以下、著者）による本書は、批判期のあらゆる局面にわたり、未熟な人間の、そして人類の啓蒙を後押しする想像力の可能性をカントが多様な観点から描写し続けようとしたことを、説得的に論証している。しかし、評者は、批判期のすべてにわたるカントの議論にも、その体系的な苦闘の機微にも、カント研究の変遷にも精通しておらず、本書が論じている広大な領野に及ぶ議論の周到さを正当に評価できる資格を持たない。

にもかかわらず、本書から多くの示唆を得たことの報告をもって「書評」と標榜することは、厚顔無恥のそしりを免れまい。しかし、カントが、ヒュームの提示した問題を、「想像力」の役割の大きさという問題として受け取っていたことを思い起こせば、ヒューム研究者が、カントの想像力論を論じる本書に関心を持つこと自体は、不思議なことでも、越権行為でもあるまい。カントは、たとえば、因果概念についてのヒュームの批判の論点を、『プロレゴメナ』の中で、印象的かつ美しい表現で形容している。いわく、「想像力の私生児（ein Bastard der Einbildungskraft）にほかならないのに、理性はそれを誤って自分の実の子と考えている」と。そして、そのほかならぬカント自身が、悟性や理性と伍すばかりか、対抗するかのとき、想像力の働きを、主題的に論じているということは、たいへん興味深い。そして、そのような議論が噴出しているのは、『判断力批判』においてであった。

そこで、『判断力批判』に描かれている想像力の活躍ぶりに喝采を送ってきた評者自身の、カントにおける想像力の位置づけ理解についてまず言及し、その後、評者の関心を誘った本書の議論のいくつかを紹介し、それについての若干のコメントを通して、本書の副題である「想像力の哲学」への書評を試みたい。

### 2. 評者にとっての『判断力批判』の魅力——想像力の広範かつタフな活躍

『判断力批判』によれば、悟性と理性を媒介する判断力には2種類ある。ひとつは、悟性と実践理性を媒介する美的判断力で、もうひとつは自然の目的という概念をめぐって悟性と理性を媒介する反省的判断力である。この2つの判断力に、どのように想像力が関わっているのかについてのカントの議論を、評者は次のように理解している。

まず、美的判断力においては、想像力は、多様な直観を悟性に媒介するという控えめな役割にとどまっていない。むしろ、直観を総合する役割ともいべきものを想像力が担うことによって、悟性とときに対抗しつつ、美的判断をなすことが可能になる。それは、趣味判断をめぐるカントの次のような説明からも明らかであろう。

たとえば、第一に、私たちの趣味判断とは、あらゆる利害関心なしに満足あるいは不満足によって表象形態を判定する能力でありそのような満足の対象は美しい、とカントとは述べているが、このような美的判定ができるのは、直観の多様な表象を、利害関心なしに快・不快の感情に関係させるという役割を想像力が果たすことによる。

第二に、概念なしに、普遍的に満足させるものは美しい、とカントが述べているように、私たちが美的判定をなす際には、表象が悟性によって一方的に拘束・規定されることなく、その満足の普遍妥当性を要求するほどに、悟性と自由に戯れる想像力が働いていることが前提となっている。

第三に、美的判定においては目的の表象なしに合目的性が知覚されると、カントが述べているように、美的判定に際しては、多様な表象があたかも一つの目的に適合している関係をもつようなかたちであることを想像力が見出すからこそ、

そのことに快を感じる。

さらに、量的に大きすぎて把握できないという意味で「数学的に崇高なもの」との会合するときですら、想像力は、それを把握できないという挫折を通じ、実践の使命感を覚醒させるというかたちで役割を果たしている。

このように、感性と悟性を媒介する美的判断力が働くために、想像力は、悟性による知的把握に一貫して対抗し続ける迫力と持続力をもって、この世界を美的に判定する見方を下準備しつづけている。

一方、反省的判断力は、この世界をたんなる機械メカニズムとして理解するのではなく、自らの欠損を修復しつつその活動を持続する生命・有機体のように、みずから形成力をもつものと見る見方を準備する。そして、その際には、世界の全体や目的を一望のもとに把握できる知性をもたない私たちは、諸部分が相互に作用しながら産出・変形・破壊を生じつつ生命活動をしている私たち自身の身体や心の有機的連関との類比という想像力に基づいて、この世界・自然の目的についての反省的判断を下している。それは、あくまで自分たち有機体のありようからの類比による主観的な解釈にすぎないが、まったく目的なく偶然に機械的なメカニズムにしたがって作動しているという世界観に対抗する世界観を準備するのも、想像力の働きであるということになる。

このように、『判断力批判』においては、所与の概念のもとに冷徹に包摂して対象を規定する悟性の働きに対抗するかのよう、しぶとく、そして快・不快の生々しい感情と結びついて、まとまりある見方を準備し続ける想像力のおかげで、私たちがこの世界の美や目的について判定することが可能になる様子が力強く描かれている。想像力の働きは、私たち自身が無自覚のうちになし、そしてときには、妄想や空想の類となり、迷信や熱狂を生みかねないものであるため、批判哲学の観点からは、「知」としての資格が厳しく吟味・限定されるに相違ないが、それにもかかわらず、カントは有機体的なありようをする私たちの心における想像力の根強い働きを無視することなく描いている。その点で、迷信や熱狂への批判的姿勢を

保ちつつ、私たちの心や社会の有機体的な変容プロセスを描こうとしたヒュームやスミスと相通じる議論を、カントは、第二批判までのみずからの体系に閉じこめることなく、『判断力批判』において敢行しているのである。

### 3. 評者にとっての本書の印象的な議論

『判断力批判』における以上のような想像力論に関心のある評者にとって、本書が提起する議論で、とりわけ印象深い論点は、『判断力批判』の解釈に関わる第4章から6章の以降に集中することになった。その議論の一部を紹介してみよう。

著者は、カントの歴史哲学、とりわけ『憶測的始元』の論述に着目し、想像力を反省的に行使することが、社交の基礎になるだけでなく、人間の感情に伝達可能性を与えるというカントの見通しに注目している。そして、想像力の反省的行使というこの概念を、『憶測的始元』と同年に出版された『方位論文』においてカントが説いた「方向づける」ことの意義と結びつけ、次のように論じている。「想像力は、感官感覚から反省的な距離をとることによって、いわば「感覚的自己」から「公衆」に向けて感情を方向づける。こうして方向づけられた感情の伝達は、わたしたちが「他人と協同して考えること」を「準備する」のである」という。ただし、このような「感情の伝達可能性」の見通しは、この時点では経験的な考察にとどまっていると著者はいい、その超越論的な議論の展開こそ、『判断力批判』の本領であると論を進める。

著者によれば、『判断力批判』がなした「転回」は、感情を「主観的な身体的反応」とみるのではなく、純然たる「想像力を介して主観的に共有されるもの」、「身体的反応」よりも「高次」の「自発的に喚起される感情」として普遍的に伝達可能なものと捉える発想の転換であるという。著者によれば、想像力を「純然たる反省に駆り立て」、想像力と悟性の「理想的な状態、すなわち、主観的合目的性に向けて方向づける」のは、「理性の関心」であるという。「理性の関心」とは、人間の心有能力（認識能力・欲求能力・感情）がもつ固有の対象間のギャップを埋め全体性を渴望す

る、理性の拡張作用であるとされる。

では、想像力の純然たる反省的行使が、理性の関心という制約によって生まれ、想像力と悟性の理想的な調和をめざす「高次の感情」であるとしても、だからといってその「高次の感情」が必然的に伝達可能になるとはどういうことか。この問いをめぐり、著者の考察は、「共通感覚」の解釈へと向かう。

著者によれば、カントのいう「共通感覚」とは、「あらかじめそなわった感官でもなければ、特定の文化、特定の共同体に共有されている「健全な常識」でもない。「共通感覚」は、「判定能力の理念」であり、「出来合いのものでなく、「判断力の反省(の作用)」によってもたらされる」という。さらに、著者は、「判定能力の理念」としての「共通感覚」を、「想像力の反省によって生み出されるべき」「心的状態の理想的な調和の段階」というだけでなく、カントが「生命感情」と呼んだ「独特の状態」と関連づけて描こうとする。これにより、共通感覚の問題は、「生命感情はいかにして普遍的に伝達されうるのか」という問題としてとらえ返されることになる、

生命感情の普遍的な伝達可能性について、著者はいう。「わたしたちは美しいものを前にしたときの「身体の全体をみたくぞくっとする感じ」によって、自分の心的状態が「調和」と呼ばれる理想的状態に置かれていることに気づく。「調和」とはすなわち、「認識一般に関して二つの〔想像力と悟性の〕心の力にとってもっとも有効な連関」である。……生命感情が「内的作用」にとって「もっとも有効な連関」、すなわち認識一般を目指す想像力と悟性の「連関」によってもたらされるならば、それは私たち一般に共有されうると言えるかもしれない。生命感情はわたしたち一般に共有され、かくして「共通感覚」が生成されるのかもしれない」と説明される。

とはいえ、「共通感覚」は「自律」と同様、あくまで理念にすぎないことを著者は強調する。個体としての人間がつねに意志によって道徳法則を立法し、それに従う自律を遂行することができるわけではないのと同様、個体としての人間は、つねに純粋な美的判断を下し、この生命感情を普遍

的に伝達できるわけではない。著者は次のようにいう。「理想的な鑑賞者は音楽作品を「反省」によって「諸感覚の美しい戯れ」として判断することができるが、現実の鑑賞者はときに「振動が〔……〕身体の弾力的部分に及ぼす効果」に影響され、作品を「快適な諸感覚の戯れ」として受容する」。しかし、「カントが述べているのは、それでもなお、わたしたちは音楽、夜会、歓談といったものを通じて想像力を楽しませ、生命を活性化させることによって、自分たちの感情を限られたサークルのなかに伝達させるということである。それは段階的に「考え方の拡張」を進めてゆくということ、あるいは理念としての「公衆」に向けてこのわたしのプライベートな身体のありよう、感情の内容を「方向づけ」てゆくということだろう」と著者はいう。

もちろん、社交が、諸刃の剣であることへのカントの目配りについても著者は言及している。つまり、社交には、人々の競争心や妬みをあおり、「他人と比較することでのみ自分の幸・不幸を判定する自己愛」、「根源悪」としての「非社会的社交性」の傾向を助長する側面があるという点への言及である。そのため、個人としては、この根源悪の完全な克服は困難であるかもしれない。しかし、「類として人間」は、「想像力と身体をそなえた人間」として、社交的伝達を通じて、「共に喜び、共に苦しむ」共感の条件となる心の諸能力を「開発」し、「人間らしい」感情の相互伝達によって、「共同体を段階的に拡張させ」、「根源悪として自己愛」を克服し、「目的の国」の理念に向けて漸進的に接近してゆき、その実現を「準備する」有限な理性的存在者の共同体であることは可能である、とカントは考えたと著者は論じる。

なお、この議論において、とりわけ印象的なのは、「傾向性」についての著者の解釈である。著者はいう。「カントの洞察によれば、傾向性とは想像力を介して対象の直接的な魅力から反省的な距離をとることではじめて獲得されるものであり、未成熟であれ、そこには行為者の理性的な自己支配の芽生えが見出される」と。そして、「共通感覚」についても、「想像力と悟性の行使によって生成される」と著者はいう。「何かを共通に感

覚することができるためには想像力を自由に行使することができなければならず、その行使がわたしたちを独りよがりな視野狭窄の状態から解放し、それぞれの実践理性を「普遍的な立場」に向けて拡張してゆくとカントは考えているのである」と、著者は結論づけている。

#### 4. 上記の印象的な議論に対するコメント

カントの超越論的批判哲学、歴史哲学、そして人間学の広範なテキストを読み解きながら、それらが互いに調和するために視野を拡張すると、以上のような、まさに「未成熟な人類のための思想」が生成してくるという著者の議論は、とても魅力的である。処置なし、出口なしの根源悪にどっぷり浸かったまま、義務を立法し遂行する使命を自覚しつつも遂げられない凡夫にとって、現実と理想を見据えたカントの「啓蒙」への希望はここにあったのかと、一種の安堵を誘う議論ともいえるかもしれない。文明社会における啓蒙のかたちというルソー的な問題に対するヒュームやスミスの議論にも通じる、想像力を基盤とした人間観、歴史観が、カントの批判哲学の枠組みと整合するための見取図としても、たいへん興味深い。

しかし、「2」で素描したように、『判断力批判』における想像力論の魅力は、「悟性との理想的な調和をめざす」という謎めいた目的に向けての、想像力の広範かつ持続的で、ときに野性的ともいえるべき、タフな下働きにこそあるのではないだろうか。

たとえば、①直観の多様な表象を、利害関心なしに快・不快の感情に関係させる。②表象が悟性によって一方的に拘束・規定されることに抗いつつ、悟性と自由に戯れて、普遍妥当性を要求する。③多様な表象があたかも一つの目的に適合している関係をもつかのようなかたちを見出し、「美」を判定し、快を感じる。④崇高な表象を把握できないという挫折を通じ、実践的使命感を覚醒させる。⑤この世界と自らの有機体としての形成力を感得する見方を準備する。以上のような想像力の下働きは、定言命法の遂行を求める純粋実践理性の峻厳な声に応じられない無力さを嘆く律儀な個人が、それでもこの世界を肯定的に捉えるために

合目的的であるとはいえよう。しかし、悟性に抗する下働きを試行し続けるタフな想像力が、人類の心の諸能力や社交を拡大し、「人間らしい」感情の相互伝達によって非社会的社交性を克服するといった、ハッピーエンドに通じているとは限るまい。

「啓蒙」を語る者が構想する楽観的ビジョンと異なる構想は、ロマン主義やモダニズムの文芸によって、さまざまなかたちで描かれてきた。たとえば、三島由紀夫の『近代能楽集』所収の「卒塔婆小町」はどうだろう。生命よりもたいせつな何かがあり、それとのかかわり方を表現する一瞬のほうが死よりも重いという考えに共感して「前へ進む」ことに生命感情を禁じ得ない人物と、それを「つまらない」と切り捨てることに生命感情を覚える人物。どちらの美的判定も、それぞれタフに起動する想像力の持続的な働きに裏打ちされており、確信に満ちているようにみえる。したがって、各々が、悟性とのまだ見ぬ理想的な調和を求めて、自らの蒙を啓くために、社交を拡大し続けるようには見えない。

では、著者がカントとともに説くように、人間は、個人としては、怪しげな生命感情もどきに囚われる頑迷さを脱しえないとしても、人類全体としては、理想的な生命感情を求めて、「目的の国」の住人に近づきつつあるのだろうか。あるいは、少なくともその可能性を宿しているのだろうか。多様な美醜への好みを共にする趣味仲間との間柄に閉塞し、自分の趣味と相容れないものに対しては、蔑んだり、反目したりすることを助長する想像力の働きや非社会的社交性は、人類全体としては、徐々に克服されつつあるのだろうか。互いに「反知性主義者」とのしり合うばかりの、細分化した共同体は、「人間らしい」共感の拡大によって、漸進的に克服されつつあるのだろうか。

著者は、「想像力の哲学」という豊穡なテーマを副題に冠する本書を、次の三つの文で締めている。一つ目の文はこうである。「想像力はそれ自体として心的能力でありながら、認識能力、欲求能力、感情といった多面的な人間の心的能力のシステムをまたにかけ、それらを媒介する力を持っている」。たしかに、私たちの心は、渾沌として

まとまりのない「知覚の束」の集積を矛盾したままに携え続けることができない。想像力は、認識、欲求、感情それぞれの微細なギャップや矛盾を探して、相互に関係づけ、まとまりのあるストーリーを虚構し、認識、欲求、感情をつないでくれる。

二つ目の文はこうである。「そして、このシステムを潜在させるそれぞれの個人を社会的共同に媒介し、さらに普遍的な共同体の理念へ方向づけてゆく」。この文の主語は、一つ目の文と同じく、「想像力」であろう。しかし、そうであるとすると、この人類史的仮説は、はたして蓋然的だろうか。一つ目の文にコメントしたように、想像力は、まとまりのあるストーリーを形成してくれる。その正当性を証拠立てる材料を、ときにでっちあげさえもして、まとまりのある世界像を、無自覚のうちに形成してくれる。それは、常套句や一般論という服を身にまとったとき、無害な外観を示すが、その服をはがすと、多様な、それでいて確信に満ちたストーリーを用意する。それでもなお、この二つ目の文が蓋然的な仮説であるとする、この文の主語は、一つ目の「想像力」とは異質な何かではないだろうか。それは、たとえば、「言語」や「習慣」や「制度」とタグを組んだ想像力かもしれない。あるいは、「悟性」や「理性」の統制に限界づけられた想像力かもしれない。少なくとも、一つ目の文と、二つ目の文の主語として想定される「想像力」の異同は、より慎重かつ正確な表現を求めて、探求されるべきだろう。

そして、最後の文は、こう締められている。「幾重にも媒介する想像力の運動こそ啓蒙の起点であり、啓蒙の推進力である」。この文を解するには、今紹介した三つの文の直前の二文と重ねるとよいかもしれない。それは、次のような文である。「カントの批判哲学は、ひとたびは分け隔てられたものを再び媒介し、統合することをめざす。この要請に応えるのが想像力である」。つまり、著者は、想像力の運動を、媒介による統合と見定めている。しかし、想像力の野性味あふれる下働きは、はたして統合に向かうものといえるのだろうか。それは、安易な統合や、愚かな分断でなく、人類史的には「啓蒙の推進力」たりうると、ほんとうに言いきれぬのだろうか。『判断力批判』に野性味あ

ふれる想像力の姿を感じる評者の想像力は、このような疑問を禁じ得ない。

しかし、本書が、そのタイトルに冠した「未成熟な人間」や「想像力の哲学」の何たるかに関心のある人をひきつけてやまない、刺激に満ちた考察に満ちていることは、疑いえない。カントに関心のある人もない人も、ぜひ一読されたい。